

短大生の実態 (その4)

—— 保育科及び児童教育学科生の音楽とのかかわり ——

The Actual Condition of the Students of the College (No. 4)

—— The Relation between the Students of The Infant Education
and the Primary Education Courses, and Music ——

黒瀬 久子 (Hisako Kurose)

藤澤 初美^{*} (Hatsumi Fujisawa)

^{*}山口短期大学講師

1. はじめに

保育者の資質については、我々もここ数年來調査を行い、いろいろと研究討議した。その調査の結果、教育現場及び保育現場からは技術的な要求が高いのが現状である。この技術的な要求もしっかりした基礎が身につき理解されていなければ実のあるものにならず、教育現場、保育現場において困惑するものと思われる。そこで昨年の調査の内容に基礎的な知的事項を加え、各自の音楽に関する学力をもう一度認識させ、今後2年間の学習に対する1つの目的と意欲をもたせると共に、講義内容においてもより一層充実させるための手がかりを得たいと考えた。この調査のうち、基礎的な知的事項についてどの程度理解把握できたかを今後追跡調査したいと考えている。

2. 調査方法及び内容

調査時期 1985年5月初旬

調査対象 下関女子短期大学保育科の一年生41名

山口短期大学児童教育学科及び併設の山口教員保母養成所の一年生89名 (男25名、女64名) 合計130名

調査方法 質問紙による回答を求めた。

調査内容

音 楽 実 態 調 査

この調査は皆さんの音楽指導に役立つためのものです。質問に正直に答えて下さい。(回答はすべて回答用紙に)

1. 高等学校で音楽を何年間履修しましたか。○をつけなさい。

a 一年間 b 二年間 c 三年間 d 履修なし

修者数は昨年より高く、未履修者は昨年より低くなっているのが特徴といえる。

また昨年は男子学生に未履修者が多かったが、今回は女子学生が多くなっている。

2) 高等学校での音楽関係サークル、クラブの活動については表1の通りである。

サークル、クラブ経験者はわずかに10名で、その内容は、吹奏楽部4名、合唱部2名、音楽クラブ、フォーク・ギター、軽音楽クラブと各1名ずつとなっている。

3) 学校での音楽は好きでしたか。という質問に対する結果は図2の通りである。

52.3%が好きと答え、逆にきらいと回答したものが7.7%であった。どちらでもないと答えたものが39.2%で、この比率は好き、きらいのどちらに比重がかかるのであろうか。不安定な要素を含んでいるように思える。

各回答を男・女別にみると、きらいと答えたものがわずかに男子学生に多く、そのほかは圧倒的に女子学生が多い。

これを高等学校の音楽履修年数との関係はどうであろうか。表2の通りである。

好きと答えたものが、音楽を履修したものの、履修しなかったものも割合が高く、どちらともいえないと答えたものが次に多い割合となり、きらいと回答したものの割合が最も低い。

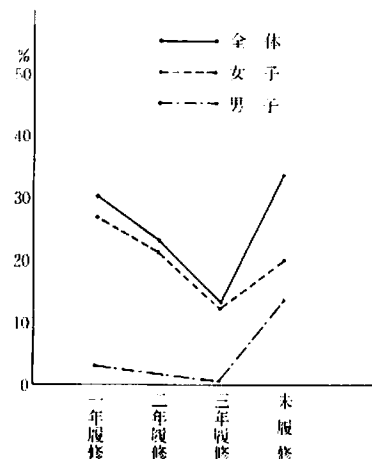


図1 高等学校の音楽履修状況

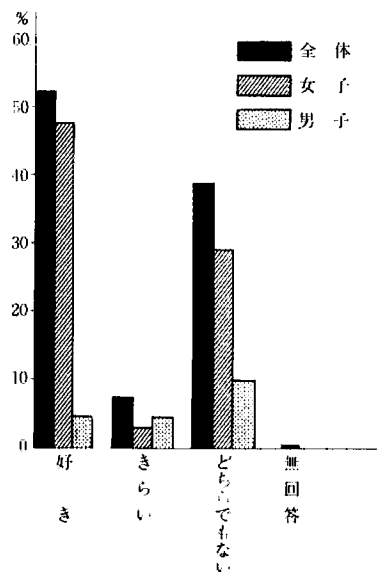


図2 学校音楽の好き、きらいについて

表1 サークル・クラブ経験者 (音楽関係)

| | 実数 | % |
|------|-----|------|
| 経験者 | 10 | 7.7 |
| 未経験者 | 120 | 92.3 |
| 計 | 130 | 100 |

表2 音楽の履修と好き、きらい

| | 好き | きらい | どちらともいえない | 無回答 |
|---------|-------|------|-----------|------|
| 一年間履修 | 15.4% | 3.1% | 11.5% | 0% |
| 二年間履修 | 12.3% | 0.8% | 9.2% | 0.8% |
| 三年間履修 | 8.5% | 0% | 4.6% | 0% |
| 履修しなかった | 16.2% | 3.8% | 13.8% | 0% |

3年間履修したものできらいと回答したものは0%である。

なかでも高等学校で音楽を履修しなかったものも、小・中学校での音楽をきらいと回答したものの比率が低く、好きであったと回答したものの比率が最も高い。

これらは履修希望を持っていても、高等学校でコースにより履修できなかったか、教科目として音楽がなかったと考えられる。

また無回答が0.8%であった。

4) 短大入学以前のレッスン経験についての質問に対しては表3の通りである。

レッスン経験者のうち男子学生は、わずかに1名で、レッスン期間も一年未満であった。

| | 実数 | % |
|------|----|------|
| 経験者 | 66 | 50.8 |
| 未経験者 | 64 | 49.2 |

これに対して女子学生は65名がレッスン経験者で、レッスンを受けた楽器もピアノが圧倒的に多く50名(38.5%)、ついで電子オルガン11名(8.5%)、オルガン3名(2.3%)、 Hammondオルガン、琴各1名(0.8%)であった。

特にレッスンを受けた年数からみると1年から14年間と幅があり、10年以上の経験者は8名であった。そのうち6名はピアノのレッスン経験者で、2名は電子オルガンのレッスン経験者であった。

またピアノとオルガン・ピアノと電子オルガン・電子オルガンと Hammondオルガンと2つの楽器のレッスン経験者が7名いた。

5) 各家庭に所有している楽器と演奏した経験のある楽器についての質問に対する回答は表4の通りである。

所有楽器もまた演奏経験のある楽器もピアノが圧倒的に多く、ピアノが各家庭に普及していることがわかる。ついでギターが多く演奏経験者も順位では三番目となっている。

つぎにオルガンを所有している家庭が多く、これはその頃盛んであった音楽教室の経験者が多く、そのために演奏経験の数値も高くなっていると思われる。

ついで電子オルガンの所有となっている。これは音楽教室終了後ピアノ、電子オルガンに移行したと考えられる。

その他管楽器についてはクラブ活動との関係と考えられる。

簡易楽器については、幼稚園、小学校でほとんどの学生が所持し、使用したと思われるが、このように所有者の数が少ないのは、紛失、不明の状態と推察される。

表4 家庭所有楽器及び演奏経験

| 楽器名 | 実数 | 演奏経験 |
|--------|----|------|
| ピアノ | 69 | 63 |
| ギター | 44 | 29 |
| オルガン | 34 | 33 |
| 電子オルガン | 33 | 22 |
| クラリネット | 6 | 5 |
| トランペット | 5 | 5 |
| 琴 | 4 | 0 |
| 三味線 | 3 | 0 |
| ウクレレ | 1 | 0 |
| フルート | 1 | 1 |
| ホルン | 1 | 1 |
| サクソ | 1 | 1 |
| バイオリン | 1 | 0 |
| マンドリン | 1 | 0 |
| 大正琴 | 1 | 0 |
| 横笛 | 1 | 1 |
| 簡易楽器 | 22 | 22 |

6) 楽譜についての質問に対する解答は図3～6の通りである。

図3は質問の①拍子記号・②ト音記号・③へ音記号・④ト音譜表の階名及びへ音譜表の階名についての正解、無解答、誤解答率を表したものである。

①拍子記号・②ト音記号・④ト音譜表の階名についての正解率は90%以上であるが、③へ音記号・④へ音譜表の階名についてはそれ以下で、これを昨年と比較してみると、①拍子記号・②ト音記号についてはほぼ昨年と同じであるが、③へ音記号については昨年90.2%であったのが今回は86.2%の正解率となり、④ト音譜表の階名も昨年97.1%が今回は93.3%と4%低い正解率、同じく④へ音譜表の階名読みでは昨年86.3%の正解率であったものが、今回は76.2%と10.1%も低くなっている。

誤解答は特に男子学生に多かった。

音符及び休符名については図4の通りである。

㉑・㉒が正解が90%以上であるのに対して㉓・㉔・㉕・㉖・㉗の正解率は低く、特に㉔・㉕・㉖は68.5%であった。

長さについては音符名の正解率が高いのに反して音符の長さの正解率が低いものとして特に㉑があげられる。ついで㉓56.9%・㉔50.8%と低くなっている。

図6で明らかのように、㉓・㉔・㉕の無解答が多く、また図5の誤解答率からみても音符の長さについての理解は音符、休符の名称以上に低いことがわかる。

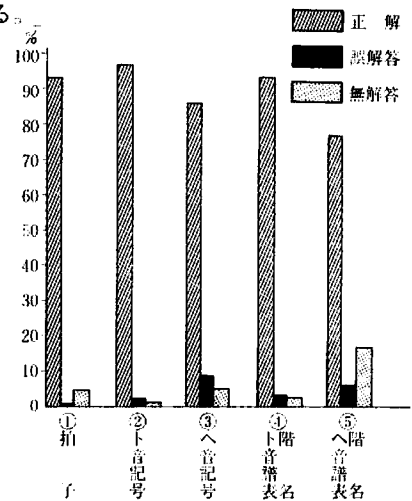


図3 拍子、ト音記号、へ音記号及びト音譜表、へ音譜表の階名、回答状況

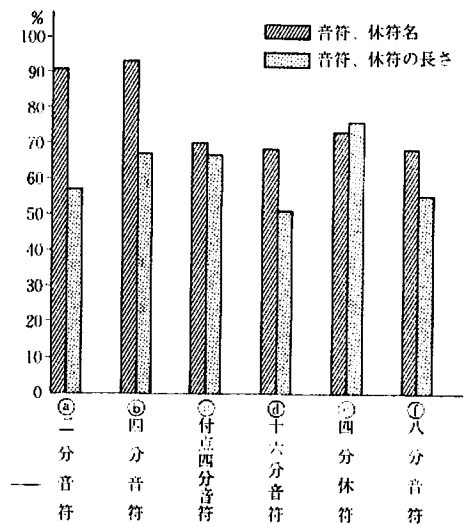


図4 音符及び休符の名称と長さの正解率

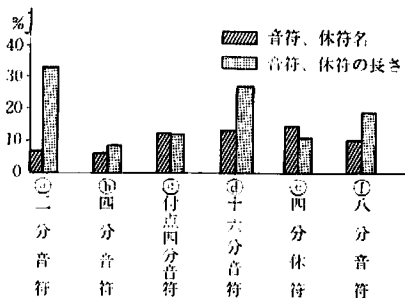


図5 各音符名、音符の長さの誤解答率

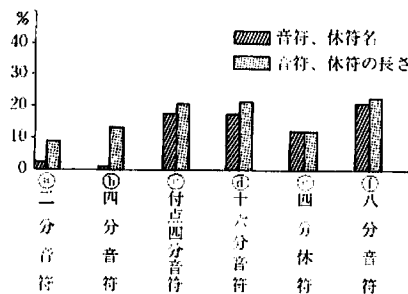


図6 音符、休符名及び音符、休符の長さの無解答率

また昨年との比較で音符名においては㉔・㉕はほぼ昨年と同率であるが、その他㉖・㉗・㉘は低くなっている。長さにおいては㉙・㉚・㉛の正解率が高くなったが、㉜・㉝は低くなっている。特に㉞の伸びはいちじるしく11%近くであった。

また㉟は今回新たに質問したもので、昨年との比較はできなかった。

7)リズム譜についての回答は図7及び図8の通りで、拍子の意味が理解されているならば指定されたリズム譜に区切ることができると考えられる。しかしそれぞれの正解率からみて明らかのように、意味を十分理解し、活用応用できるまでにいたっていない。このことは無解答率をみると明白であり、かつまたそれらがリズム譜の誤解答にも表れていると考える。

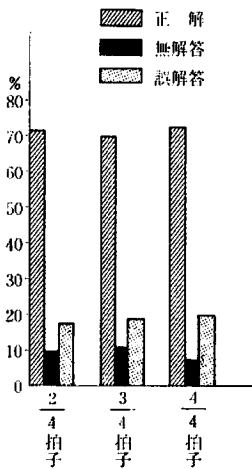


図7 小節区切りの解答状況

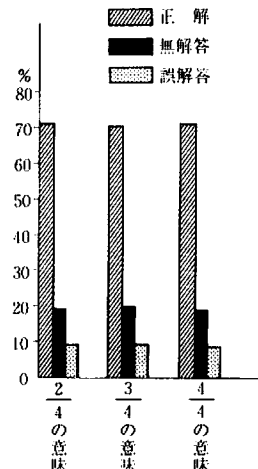


図8 2/4, 3/4, 4/4の意味についての解答状況

8)記号の読みと意味について 表5 記号の読み及び意味について

ての結果は表5の通りで、読みについては正解率の低いものは㉑ rit. ㉒ $\overline{\text{rit}}$ であり50%を割っているのが目立つ。無解答も㉓ $\overline{\text{rit}}$ について㉔・㉕ $\overline{\text{rit}}$ と多く、誤解答においては㉖ rit. が特に目立っている。

またこれらの記号の意味についても㉑ rit. ㉒ Andante の正解率は低く20%以下である。

| | 記号の読み | | | 記号の意味 | | |
|---|--------|--------|-------|--------|--------|--------|
| | 正解率 | 無解答率 | 誤解答率 | 正解率 | 無解答率 | 誤解答率 |
| ㉑ | 77.7 % | 16.2 % | 6.2 % | 28.8 % | 46.9 % | 29.2 % |
| ㉒ | 60.0 | 18.5 | 16.9 | 51.5 | 33.8 | 14.6 |
| ㉓ | 43.8 | 24.6 | 31.5 | 18.5 | 51.5 | 30.0 |
| ㉔ | 49.2 | 35.4 | 15.4 | 30.8 | 33.8 | 35.4 |
| ㉕ | 86.2 | 13.8 | 0 | 18.5 | 58.5 | 23.1 |
| ㉖ | 65.4 | 23.1 | 11.5 | 53.8 | 33.8 | 12.3 |
| ㉗ | | | | 23.8 | 69.2 | 6.9 |
| ㉘ | 80.8 | 14.6 | 2.3 | 69.2 | 26.2 | 4.6 |
| ㉙ | 89.2 | 7.7 | 3.1 | 65.4 | 23.8 | 10.8 |
| ㉚ | 83.8 | 13.1 | 3.1 | 46.9 | 47.7 | 5.4 |
| ㉛ | 90.0 | 8.5 | 1.5 | 74.6 | 24.6 | 0.8 |
| ㉜ | 60.0 | 30.7 | 9.2 | 74.6 | 10.8 | 14.6 |
| ㉝ | 59.2 | 33.8 | 6.9 | 52.3 | 34.6 | 13.1 |
| ㉞ | 58.5 | 30.0 | 11.5 | 73.8 | 12.3 | 13.8 |

無解答は㊦レガート・㊧ Andante・㊨ rit.・㊩ Moderato・㊪ Allegro、誤解答は㊫ ♯・㊬ rit.・㊭ Allegro・㊮ Andante が高い比率となっている。

これら記号の読み、意味ともに特に問題と考えられるのは、㊨ rit. である。これらの記号の読み方については、英語読みで答えたものが多かった。いずれにしても、正確に記憶し、それが実際の音楽表現と密着したものとなり得ていない。それが表現の乏しさといった一面に表われてくると考えられる。

9) 幼児音楽で学びたいことについては内容が多岐にわたっているので、表6のように分類した。

指導者自身の技術及び指導法に関する内容のものが多い。なかでも発声、ピアノ、うたいびき、リズム、指導法に関係するものを学びたいことと考えている。

つきに音楽、音楽リズムの内容に関するもので、子どもに教えるうたが多く、ついで音楽的知識となっている。

楽器については簡易楽器の奏法と合奏に集中している。

その他では音楽と子どもとの深いつながりといった内容のものも多く、それが情操を培うことのできるようという内容のものである。

昨年と比較すると、まず無回答が18.2%が今回は14.6%であること。わからないが1.97%に対し今回は0.8%であった。音楽、音

| 項 | 目 | 実数 | % | |
|----------------|------------------------|--------------|------|--------------|
| 音楽・音楽リズムに関するもの | ・知らないうたを多く覚えたい | 26 | 20.0 | 42名 32.3% |
| | ・音楽的知識 | 9 | 6.9 | |
| | ・理論 | 3 | 2.3 | |
| | ・幼児のリズム感 | 1 | 0.8 | |
| | ・音楽鑑賞(クラシック) | 1 | 0.8 | |
| | ・子どもにどんな音楽を教えるか | 1 | 0.8 | |
| | ・子どものこのむ音楽、生活に接している音楽 | 1 | 0.8 | |
| 技術及び指導法に関するもの | ・指導法 | 14 | 10.8 | 65名 50.0% |
| | ・発声法 | 10 | 7.8 | |
| | ・ピアノ | 8 | 6.2 | |
| | ・正確なリズム | 8 | 6.2 | |
| | ・うたいびき | 7 | 5.4 | |
| | ・即興でまたコードネームをみてピアノがひける | 4 | 3.1 | |
| | ・うたの表現 | 4 | 3.1 | |
| | ・伴奏 | 2 | 1.5 | |
| | ・内容の充実した授業 | 2 | 1.5 | |
| | ・基礎技術 | 1 | 0.8 | |
| | ・演奏の仕方 | 1 | 0.8 | |
| 楽器 | ・動きをともなうたい方 | 1 | 0.8 | 24名 18.5% |
| | ・技術を学びたい | 1 | 0.8 | |
| | ・子どもにどのような音楽を学び与えられるか | 1 | 0.8 | |
| | ・子どもに正確でわかりやすい説明ができる | 1 | 0.8 | |
| | ・簡易楽器の使い方と演奏 | 21 | 16.2 | |
| | ・合奏 | 3 | 2.3 | |
| | その他 | ・子どもと音楽のたのしさ | 6 | |
| ・子どものすなおな心 | | 1 | 0.8 | |
| ・音楽の重要性 | | 1 | 0.8 | |
| ・情操を培う | | 1 | 0.8 | |
| ・子どもの興味のもち方 | | 1 | 0.8 | |
| ・わからない | | 1 | 0.8 | |
| ・無回答 | | 19 | 14.6 | |

楽リズムの内容に関するものは昨年28.1%、技術及び指導法に関するもの43.3%、楽器に関するもの6.9%であったが、今回の調査ではそれぞれの比率が高くなっている。無回答者が少ないということとあわせて、学生達がそれぞれに目的をもっているものと考えられる。

なおこれら学びたいことの内容も一人で二つ以上の記述をしているものもあり100%以上である。

10) 音楽の重要度について

図9のように93.1%が非常に重要、重要と答えている。特に男子学生がすべて、非常に重要、重要と答えていることに注目したい。

これは音楽が教科目としてでなく、我々の生活と密着したものと捉えられているようにうかがえる。

まとめ

今回の音楽実態調査をするにあたり、質問項目の3)・7)・8)を新たに加え、今までの音楽の履修と音楽学力について考えてみた。

その結果音楽の履修については調査した学生の約3は未履修者で、サークル、クラブにおける活動も非常に少なかった。

つぎに新しく加えた質問であるところの学校の音楽については約半数以上の学生が好きであったと回答している。この数値をみるかぎりでは喜ばしいことだといえる。

レッスン経験者については昨年とほぼ同じ状況である。

家庭の所有楽器について簡易楽器以外では鍵盤楽器、管楽器、弦楽器、和楽器の名前が回答されている。しかし弦楽器、和楽器の演奏経験者が少ないが目につく。

質問の6)・7)・8)の楽譜及び諸記号については基礎的な知的理解ができていないことが明らかである。その結果は楽譜をみての表現、すなわちうたい、ひくことを考えても、表情に乏しく感情にうったえるものに欠けると思われ、応用力にいたってはさらに乏しい状態と思われる。このことは音楽で学びたいことの内容と関連していると考えられる。このうち今回の調査ではこの音楽で学びたいことのその他の内容について、「音楽を通して子どもと共に楽しさ、心、情操を培う」といった子どもとのかかわりあいといった事柄に注目を要すと思う。

これらのことは、音楽の重要性とも深い関連があると思われる。

以上今回の調査から学生にとっては基礎的事項が十分な理解がなされていなければさらに深い内容の理解は困難であり、理想的な音楽教育をめざすためにはなお一層の各自の努力が必要であることを十分認識させると共に、音楽教育の指導にたずさわるものにとっても、指導内容

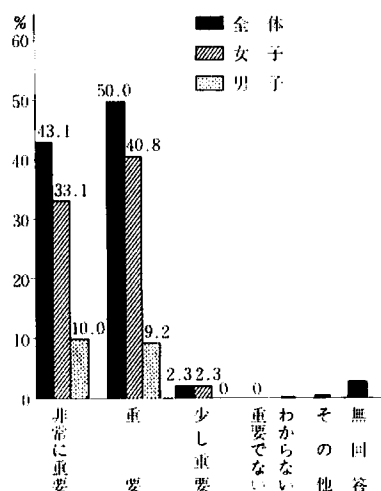


図9 音楽の重要度

をさらに充実させるよう努めたいと思う。

【参考文献】

- ・ 1985年日本保育学会第38回研究論文集
保育者養成校の音楽教育に関する一考察（その3）
— 現場が求める保育者の音楽技能 —
藤岡明子・黒瀬久子・藤澤初美
村上玲子・三好良枝・和田良子
- ・ 1985年山口短期大学研究紀要第7号
小学校教員養成課程学生の学習音楽能力の実態（その1）
藤澤初美
- ・ 1984年下関女子短期大学紀要第3号
保育科学生の実態（その3）
— 音楽とのかかわりについて —
黒瀬久子・藤澤初美